

11月の植物

シチメンソウ（ヒユ科：APG分類体系）

学名：*Suaeda japonica* Makino



東与賀海岸のシチメンソウ群落。台風や気温の影響を受け、年により色づき具合は異なる。

シチメンソウは九州を代表する一年生の塩生植物である。絶滅の危機にある植物として環境省は絶滅危惧Ⅱ類に指定している。過去には福岡県や大分県の周防灘にも知られていたが、現在は有明海沿岸のみに生育し、東与賀海岸、六角川河口、塩田川河口などが主な自生地である。11月上～中旬ごろに有明海干潟を真っ赤に染める様子は海の紅葉と称され、東与賀海岸ではその頃に「シチメンソウ祭り」が開催されている。

シチメンソウは1月に発芽するが、新芽は淡紅色を帯び3月までは赤味を増していく。4月頃から徐々に色が薄くなり、盛んに成長する6～7月頃は淡黄緑色を経て緑色になる。9月に花弁を持たない花を付けるが、果実が成熟する10月から色づき始め、11月に一面の紅葉となる。このように年間通して様々に色が変化するので、七面鳥を連想してシチメンソウの名前が付いたとされている。

長崎県の諫早湾には日本最大のシチメンソウ群落があったが、国営干拓事業によりほぼ消滅してしまった。そのため、現在では東与賀海岸の群落が日本最大である。現在の分布域のほとんどは佐賀県内であるが、主要な生育地の多くが近年急激に縮小傾向にある。有明海の干潟は毎年堆積がすすんでいる。シチメンソウ是一年草であるため、波浪によって表土が攪乱され裸地になった立地に進出し群落を形成する。干潟の堆積がすすむと攪乱の頻度が下がり、環境が安定してヨシ群落が勢力を広げてくる。そうなる競争に弱いシチメンソウは消滅する。ほぼ佐賀県だけに分布が限られるシチメンソウの生育適地がこれ以上減少しないよう早急な対策が必要である。